

論文の和文要旨	
論文題目	台湾海陸客家語のアスペクト体系研究
氏名	遠藤雅裕

漢諸語のアスペクトの諸標識について、従来、細分化された記述や、“體”と“貌”といった分類等が行なわれているが、分類基準や階層性等についての議論は不十分である。本論では、台湾海陸客家語の各アスペクト標識の意味的・統語的側面を記述し、陳前瑞(2008)の標準中国語についての「四階層アスペクト体系」を作業仮説として体系化を試みた。「四階層アスペクト体系」の特徴は、アスペクトを動詞（句）内部の事態アスペクト・事態内部の段階アスペクト（基本的／量的）および視点アスペクト（周辺の／中心的）に階層化し、アスペクト形式を連続した一つの体系内で扱っている点である。この体系では、視点アスペクト等について、標識の文法化の程度が分類の指標となる。このため、摩滅が進んで由来が不明である標識については、通時的および言語地理学的なアプローチも採用して考察を行なった。

考察の結果は下図の通りである。この図では、階層性を横方向に列で表わしている。海陸客家語のアスペクト体系について明らかになった主たる特徴は、以下の6点である。[1]完了相に専用標識は存在しない。[2]既然相“le⁵³了”は動詞“了”に由来し已然の事態に限定される傾向がある。[3]“過”は完結相と補償相について相補の関係にある。[4]完結相“掉”は段階アスペクトと視点アスペクトの中間の特徴を備える。[5]短時相・即時相標識はいずれも動量詞“下(子)”に由来する。[6]短時相と反復相は関連するカテゴリーである。なお、事態アスペクト、および短時相の「VV」等、構文的形式は割愛している。

海陸客家語のアスペクト標識体系の階層構造

標識		段階アスペクト	視点アスペクト	
		量的	周辺の	中心的
1	-a ³³ lə ³³ 啊仔	短時相		
2	-ʒit ⁵⁻³² ha ³³ a ³³ lə ³³ 一下啊仔	短時相		
3	-(ʒit ⁵⁻³²) ha ³³ (一)下	短時相		
4	-a ³³ 啊-	即時相		

		基本的		
5	- hi ³⁵ loi ⁵⁵ 起來	起動相/結果相		
6	- ha ⁵³ hi ²¹ 下去 / - ha ⁵³ loi ⁵⁵ 下來	継続相		
7	- ho ³⁵ 好	完結相		
8	- to ³⁵ 倒	結果相		
9	- liau ³⁵ 了	完結相		
10	- t ^h et ⁵ 掉	完結相		
11	- ko ²¹ 過	完結相/補償相	経験相	
12	ʃit ⁵ 識 -		経験相	
13	- le ⁵³ 了#		既然相	
14	t ^h o ⁵³ kai ⁵⁵ 在該- / t ^h o ⁵³ lia ⁵⁵ 在這-		進行相	
15	- nen ³⁵ 等			非完了相

*図表中の「-」は動詞（句）が接続することを、「#」は句や文が終止することを示す。

本論は、8章からなっている。第1～3章は本論の前提となる部分、第4～7章は本論の中心的部分である。

第1章「序論」では方言文法研究史および本論で扱う文献資料等について略述した。

第2章「音韻体系」では、海陸客家語の音韻体系について記述し、文法化等で見られる音声現象の理解等の一助とした。

第3章「分析の枠組み」では、漢諸語のアスペクト研究を振り返るとともに、「四階層アスペクト体系」を確認した。

第4章「事態アスペクト」では、陳前瑞(2008)の欠性対立に基づく事態アスペクトの分類を作業仮説として、動詞および単純な目的語をもつ動詞句等に限定して、その事態アスペクトを以下のように分類した。すなわち、状態型（終結性(ø)・動態性(ø)・持続性(+))、活動型（終結性(ø)・動態性(+・持続性(+))、到達型（終結性(+・動態性(+・持続性(ø))、達成型（終結性(+・動態性(+・持続性(+))である。状態型には標準中国語よりも動態性が顕著な成員が含まれる。

第5章「段階アスペクト」では、基本的段階アスペクトとして完了・補償・結果・起動・継続、量的段階アスペクトとして短時・即時・反復について検討した。

完結相標識“掉”“好”“過”“liau³⁵了”は内容語的な意味とともに、事態内部の終結点を表わすというアスペクト的な意味を持つ。“掉”は消失義・完結義とともに、動作行為の結果状態の持続を表わす実現義を持つ。また、完結義・実現義とも過程性を持ち、自然な終結点に至るという完遂義や「程度の最大化」を表わす。“過”は限界の通過を意味し、完遂義はもたない。“liau³⁵了”も完遂については無標である。これらの標識は、数量表現等で量化されると自然な終結点に至ったことを表わし、互換が可能となる。これは、量化が完了相的解釈を担保することで、標識間の相異が中和されるためである。

これらの標識は、動詞後置という点で結果補語とも範列関係にあるが、“掉”および“liau³⁵了”はさらにこの外側に位置することもある。よってこれらは既然相標識と範列関係にあるといえるが、一方で、既然相標識は「V{掉/liau³⁵了}」にも後続する。このような統語的特徴から、“掉”“liau³⁵了”は完結相標識と既然相標識の中間に位置しているといえる。また、“掉”“好”“過”は内容語的な意味をもつがゆえに分離型を形成する。

“掉”の由来には定説がない。言語地理学的・歴史音韻論的検討から、本論では“p^hiet7 撇”と同源の可能性が高いと判断した。

補償相標識“過”は未然の事態に使用され、不如意に終わった行為をやり直すことを表わす。数量補語とは共起しないが、これは量化による完了相的解釈が、補償相的解釈を排除するためであると考えられる。よって、完結相標識“過”とは相補的關係にあるといえる。

結果相標識“倒”は、動作行為が実現することを表わす。動詞が状態型や活動型の場合、文脈によって実現した後の状態や活動の持続を含意する。この点で事態の終結点を示す完結相標識とは異なる。統語的には、完結相標識同様分離型を形成する。“倒”は到達義の“到”に由来する。この文法化の過程で声調が陰去(21)から上声(35)に変化した。

起動相標識“起來”および継続相標識“下去”“下來”等は、複合方向補語に由来する。“起來”は、活動型・状態型動詞については始動義および結果義、到達型・達成型動詞については結果義という解釈がなされる傾向がある。また離脱義・消失義動詞とは共起しにくい。これは“起來”の「下から上への移動」という原義に起因する。統語的特徴としては、“起”と“來”、および先行するVと“起來”の分離が挙げられる。

継続相標識“下去”“下來”も動詞について選択制限がある。“下去”は、共起する動詞が活動型に限定される傾向があり、事態の継続をあらわす。一方“下來”は、具体的成果が生じることを含意する動詞（“寫”“買”等）や一部の消極的意味をふくむ状態型動詞（“暗”“恬”等）と共起しやすい。

“下去”が指示する事態は参照時の前から続き、参照時の後も続くと解釈される。一方、“下來”も事態の継続を表わすが、到達型・状態型動詞と共起すると結果義と解釈される傾向がある。

短時相をになう形式は多様であり、接辞が付加する「V(V)啊仔」型・「V(一)下」型・「V 一下啊仔」型と構文的な「VV」型および「VV 仔」型等がある。標準中国語の短時相形式「VV」は、短い持続と終結性が主たる意味的特徴であるが、海陸客家語も同様である。また、「V 啊 V」型および「V 啊 V 仔」型は反復相を兼ねる。短時相の形式を構成する要素の中で、“啊仔”は摩滅が進んでいる標識の一つで、“一下子”（しばらく）の省略形式である“下子”に由来している。この短時間性と有界性が短時相標識になお残存し、後者は事態を不可分のものとして認識する完了相的解釈を可能とする。

反復相は、先行研究によれば、回数が限定されない重複的動作行為を指示し、形式的には語彙的手段によらず、“反反覆覆”“走來走去”のような各種の構文的手段をとる。海陸客家語の「V 啊 V(仔)」型と「V 等 V 等」型はこのような反復相をになう形式である。

即時相標識“啊”は客家語に特有であり、海陸客家語でも先行研究の指摘同様、[1]動補構造の間に挿入され、[2]動補構造が指示する動作行為が短時間継続あるいは実現することを示し、[3]複文の前節で使用されることで、前節が指示する事態が実現後、直ちに後節が指示する事態が実現することを表わす。標識“啊”は動量詞“下”に由来する。“下”の文法化は「V 下 N」型ではじまり、短時相標識となった後、統語的環境が「V1 啊 V2」型や「V 啊 C」型に拡大して即時相標識となった可能性がある。

第6章「視点アスペクト」では、周辺の視点アスペクトとして既然相・経験相・進行相の各標識を考察し、併せて既然相と関係し、専用標識が存在しない完了相についても考察した。ゆえに中心的視点アスペクトは、非完了相についてのみ考察した。

既然相標識“le⁵³ 了”は、意味的・統語的に標準中国語の文末詞“了₂”とほぼ平行するが、“了₂”よりも制限がある。意味的には、事態の終結を表わし、それが参照点と関連することを含意する。また傾向として已然の事態に使用され、未然の事態については使用されない。“le⁵³ 了”は句末や文末に使用

され、結果/方向補語や段階アスペクト標識と共に起る。ただし諾否疑問文では使用されず、疑問詞疑問でも使用頻度が低い傾向がある。

“le⁵³ 了”の由来については、“來”説と“了”説の二つがあるが、本論では後者を支持する。理由は次の通りである。[1]動詞接辞の完了相標識が存在しないため「VO 了」が完了相的解釈をされるが、この形式は官話の“了”の発生の契機となった「VO 了」構造と平行する。[2]“了”由来の文末詞を持つ客家語は粵台片に複数存在する。[3]陰平“le⁵³ 了”は、上声“了”の白話音でより古い音声形式である可能性がある。

経験相には動詞後置の“過”と動詞前置の“識”という二つの標識がある。前者は完結相標識“過”がさらに文法化したもので、事態が参照時にはすでに完結し、かつ参照時とは非連続であるという意味特徴を持つ。このような“過”の意味特徴は、原義である通過義の残存である。一方、“識”にも同様の意味特徴があるが、「知っている」という内容語的意味も持つ。つまり両標識とも文法化が相対的に進んでいない。両者は統語的位置が異なるために、共起が可能である。

進行相をになう標識は数が多く、常用の“在該”“在這”のほかに、“當”“到該”“當到該”等がある。いずれも動詞に前置し、事態が時間の推移とともに変化することを示す。このような標識の競合は完結相標識と類似する。また「処格標識＋指示詞」という形式が指示性を維持していることから、このカテゴリーが相対的に新しいものであると推測できる。

非完了相標識“等”は、活動型・達成型動詞以外に、状態型や到達型動詞とも共起する。状態型動詞は変化を含意する動態形容詞に限られ、“等”の付加により、時間の推移に従って状態が変化するという、漸進性の活動型に変わる。一方、到達型動詞は“等”の付加により次のような二つの変化が起きる。一つは当該の事態の背景である前段階部分が前景化し、かつ動態化する。もう一つは終結点が背景化することである。これによって事態は無界化し、非完了相的解釈となる。

“等”の由来については、“緊”説・“定”説および場所詞説等があるが、“等”との音声的・意味的・統語的類似性・地理的隣接性および通時的状況から、本論では“緊”由来説が、相対的に説得力があると考えられる。

第7章「実現モダリティ“有”との関係」では、完了相標識説のある動詞前置の“有”について考察を行ない、当該標識が完了・非完了を含むアスペクト標識と共に起る可能であることから、実現モダリティ標識と判断した。アスペクト標識を伴う文は、主として実現モダリティ“有”が作用する実在性の領域で作用していることになる。

なお、海陸客家語には完了相の専用標識が存在しない。完了相的解釈は事態の終結性等、事態アスペクトや段階アスペクトがより大きく作用している。漢諸語のアスペクト標識は、主として南北朝期から隋唐期にかけて登場し、宋代に基礎が築かれた。さらにそれ以前の上古漢語では、基本的アスペクトは“畢”“已”等のアスペクト動詞や事態アスペクトによってなわれていた。海陸客家語で観察される視点アスペクト標識の部分的欠如や、段階アスペクトの細分化は、漢語史における相対的に古い特徴を反映しているものといえる。

以上